

「底が突き抜けた」時代の歩き方 255

在日はいつまで「並んで座る」ことができないのか ― 映画『GO』

映画『GO』を観た。面白かった。主演の窪塚洋介の面魂がよかったし、眼光もイキイキしていたしね。ハイ、終わり…。ってわけにはいかないのは、` なんなんだよー、これは` と叫ぶ窪塚演じるところの主人公のやりきれなさが、映画を観終わったいまでもこちらの胸元にぐっと突き刺さってくるからである。「これは僕の恋愛に関する物語なのだ」と、自分語りのナレーションも兼ねる主人公が繰り返し呟くように、この映画は高校生の男女の恋愛映画であり、鈴木清順監督の傑作『けんかえれじい』にも通じる、悪ガキたちの無鉄砲ぶりを描いた痛快な青春映画なのだ。しかし、そこに「在日」問題が一本尖った棘のように、思いも寄らずつうと突き刺さってくる。` なんなんだよー、これは`

観ていない人のために、映画パンフからストーリーを切り取って、次に貼り付けておきます。

《杉原は高校3年生。あだ名は“クルパー”。普段はまったく意識しないが韓国の国籍を持ついわゆる「在日」。未だに将来の夢も進路も決まらず、バスケ部を辞めて以来、喧嘩しかすることがない。中学までは民族学校に通っていたが、広い世界を見たくなり、意を決して日本の普通高校へ入学した。

3年前、杉原の父・秀吉は、ハワイ旅行をきっかけに国籍を“朝鮮”から“韓国”に変えた。秀吉は元ボクサー、幼い頃からボクシングを叩き込まれた杉原も、喧嘩では現在24連勝中。記念すべき初勝利の相手は、今やすっかり仲良くなったヤクザの息子の同級生・加藤で、杉原がへし折った鼻を整形したら女にモテはじめたというハッピーな男。杉原のまわりには他にも、線路に飛び込んで電車と競争する命がけの肝試し「スーパー・グレート・チキン・レース」で杉原以外の唯一の生存者タワケ先輩や、杉原とともに民族学校で教師たちから目の敵にされ続けた元秀（ウォンス）などクセ者がたくさんいた。彼らとつるむのも悪くなかったが、杉原が親友と呼べるのは民族学校開校以来の秀才・正一（ジョンイル）だけだった。音楽、映画、小説…何だって詳しい正一とくだらない冗談を交えながら喋るのは本当に楽しい時間だった。

ある日杉原は、加藤のバースディパーティーで声をかけてきた少女・桜井と突然の恋に落ちる。人生に女の子という文字など無いと思っていた杉原でも、ぎこちないデートを重ね、2人で同じ場所を歩き、同じものを観て、同じものを聴くたびに互いの気持ちが近づいてゆくのがわかった。桜井の家に招待されて両親に会い、噛み合わない会話を交わした後、部屋で2人はキスをする。…いつかは告白しなきゃならない。自分が「在日」であることを…そのことが時々杉原の頭をよぎるけれど、それで全てを失うはずはないと思っていた。怖いくらい何もかもがうまく回り始める日々に、杉原は有頂天になっていく。

悲劇は突然起こった。親友・正一が駅で少年に刺され、命を落としてしまう。誤解がも

とで起こった事故だった。「話したい事があるんだ。すげえ事なんだ。オマエならわかってくれると思うんだ」直前まで正一と電話で話していた杉原の耳には、正一の最後の言葉がいつまでも残って離れなかった…》

正一の落命は、日本人の少年がチョゴリを着た少女に言い寄ったのを、因縁を付けていると思った正一がその少年を追い払おうとして起きたのであり、もしその少女が同じ民族学校の生徒でなければ正一が手助けしなかったかもしれないと考え、そこにも「在日」が影を落としていると感じられる。落ち込んでいた杉原と励ます桜井がホテルへ行って抱き合うその前に、杉原はいままで言ってなかったことを話す口調で「在日」であることを告げたとき、意外なことに桜井は身を固くしながら、小さい頃から「在日」の人と付き合わないよう親から言い聞かされて育ったと口にし、「理屈では分かるけど、汚れるような気がする」といって拒絶する。ラストは別れて半年後、桜井は電話で呼び出した杉原に、いまでも好きであること、親の言うことを聞かないで自分で判断して歩むことを語り、二人が固く抱き合う、とりあえずはハッピーエンドである。

杉原は自分が「在日」であることに、ほとんどこだわりなくこれまで生きてきた。そうであるなら、桜井に告げなくてもよかったのである。しかし、杉原は拒まれるとは思わず、打ち明けた。彼はなぜ打ち明けたのか。彼女を騙すとかいうことではなく、彼自身「在日」であることに気を留めていなかったのだから。彼が打ち明けたのは、たぶん父親との親子関係からやってきたと思われる。在日社会が儒教社会での濃密な親子関係であり、その上ボクシングを介して杉原と父親は向き合うようにして生きてきたのである。自分が「在日」であることを意識していないとはいえ、日本人が「在日」をどのように見ているのか、そのニュアンスをそれなりに感じ取っていた杉原は、父親と向き合ってきた関係そのままに彼女と濃密に向き合おうとしたといえる。「在日」は向き合う関係の中に放り込まれようとしただけであって、「在日」を介して彼女と向き合おうとしたわけではなかった。ところが予期せぬことに、日本人の彼女は「在日」であることに躓き、向き合う関係は成立しなかったのである。

男女の向き合う関係について、文芸評論家の三浦雅士が『読売新聞』（01.10.23）で川上弘美の『センセイの鞆』を取り上げて、面白い見方を開陳している。

《語り手は30もなかばを越した女性。その女性が、駅前の一杯飲み屋で隣り合わせた姿勢の良い老人に恋をした。老人、じつは高校で国語を教わった先生。センセイのほうはいくまでも先生であることを守る。守るその姿勢に、語り手の大町ツキコさんはいよいよ惹かれてゆく。その過程がユーモラスになるのは当然。二人は最後には結ばれるのだが、その直後にセンセイの死がほとんど唐突に描かれて小説は終わる。

教師と生徒のあいだの一線が、ここでは隣り合わせて並んで座るというかたちで示されている。比喩的にいえば、ツキコさんは男女として向き合おうとするのだが、センセイはいくまでも教師と生徒として並んで座ろうとするのである。独立を保つその距離によって、センセイは魅力的な一冊の本になる。そしてまた、ツキコさん自身も自分の心が一冊の本、つまり謎であることを見いだしてゆく。それを解読してゆく過程がこの本そのもので、だから結ばれた瞬間に唐突に終わる。終わらなければならなかったわけだ。

村上春樹の『風の歌を聴け』以後、日本文学の主人公たちは並んで座るようになった。男女が向き合った瞬間、支配と被支配の葛藤が訪れる。村上春樹は、葛藤を描くのが小

説だという常識にノン^{とな}を称えたのである。それが読者に支持されたのだ。こうして小説の主人公のほとんどが、並んで座る单身者の悲哀をじつに優雅に身に着けるようになったが、その結果、主人公たちはいっこうに行動しなくなってしまった。せいぜい歴史、つまり思い出を探索する程度になってしまった。誰も未来に乗り出さなくなってしまった。無理に乗り出そうとすると、破壊と暴力を描く以外になくなってしまった。

『センセイの鞆』は、そういう流れをととても象徴的に示しているように見える。作者はセンセイとツキコを強引^{ほうぼう}に向き合わせようとした。その結果、センセイは死ぬことになってしまった。〈ただ儚々とした空間ばかりが、広がっている〉鞆をツキコに残して。

池澤夏樹の『花を運ぶ妹』の英語版が刊行されたが、そこには兄と妹が並んで座っている。並んで座ってなお未来に向かって身を投げ出すには、兄と妹との関係以外にはありえないのだとでもいうように。『花を運ぶ妹』と『センセイの鞆』の結末に、日本文学の現在がとてもよく語られているようだ。》

もし文学というものが現在の社会のありようと無縁ではないとするなら、それらの作品の結末に、日本の社会の現在がとてもよく語られていることもまた間違いない。三浦氏の指摘の興味深さはいうまでもなく、向き合う関係から並んで座る関係への転換にある。向き合わなくなって並んで座るようになった結果、一体どうなったのか。彼らは「いっこうに行動しなくなってしまった」。男女関係でいえば、恋愛がほとんど成立しなくなって、「並んで座る单身者の悲哀をじつに優雅に身に着けるようにな」り、極力内面的な葛藤を避けることになった。「並んで座る」セックスには始めも終わりもない代わりに、二人の未来もなくなってしまった。つまり、コミュニケーションの必要性はなくなってしまった。

『センセイの鞆』のツキコさんは、教師と生徒の「並んで座る」関係に収まり切れなくなった感情を抱くことになった。しかし、「並んで座る」関係には終わりは訪れないが、センセイと向き合うことは「教師と生徒として並んで座る」関係の終わりであり、その終わりは「向き合う」関係そのものの終わりにまで踏み入っていく。恋愛は恋愛の終わりによって終止符を打たれることを欲するからだ。では、胸が焦がれる恋愛が終わった^{ほうぼう}あと、一体何が残っているのかといえ、一個のセンセイの鞆であり、そこには〈ただ儚々とした空間ばかりが、広がっている〉。独身のツキコさんはたぶん、「並んで座る」自分の人生がこれからもずっと続くことに耐えられなくなったのだ。「並んで座る」関係が嫌になったのである。終わりがやってきてもいいから、センセイと向き合おうとしたのだ。そしてツキコさんは、〈ただ儚々とした空間ばかりが、広がっている〉終わりの味を噛みしめることができたのである。

もしツキコさんが「並んで座る」関係を続けていたなら、始まりも終わりもない関係のなかでセンセイは生き続けることになっただろう。ツキコさんもセンセイも「並んで座る单身者の悲哀をじつに優雅に身に着け」たまま。だがその光景は、高度な医療社会の中で生きることの悲哀をずっと感じながら、命の終わりが引き延ばされていく点滴注射の人生を想起させる。「並んで座る」関係は延命措置の人生と似通っていないか。死と並んで座っているだけで、死と向き合うことはずっと猶予されているのだから。

不毛な関係しか生み出さないこれまでの「破壊と暴力」はノン、「支配と被支配の葛藤」に覆われた男女関係もノン、並んで座っているだけでいいね、というのがいまの付

き合いかたの流儀になった。ところが、「並んで座る」関係から取り残されていく者も出現し始め、その中から殺人によって「並んで座る」関係を消去する事態もあらわれるようになった。なにより「並んで座る」関係は「向き合う」関係の逃避にすぎず、「支配と被支配の葛藤」からも「破壊と暴力」からも遠くなった代わりに、そこを突き抜けて、「並んで座る」関係の中から「向き合う」ことを生み出す課題を自ら突きつけなくなった。

映画『GO』をその中に置いてみると、「在日」だけではみえなかった問題がくっきりと浮上してくる。杉原から「在日」を告げられた桜井が拒んだのは、本当は「在日」ではなく、これまでの「並んで座る」関係から「向き合う」関係への転換であったかもしれない。そう考えると、二人の関係が成立しなくなったのは、「在日」が原因ではなく、「向き合う」関係へと余儀なくされねばならなかったからだということになる。では、「在日」はほとんど取るに値しない問題であるのかといえば、けっしてそうではない。この映画では「在日」は「在日」としてではなく、日本人同士であればすなりと「並んで座る」関係の中で進行したかもしれないドラマが、相手が「在日」であることによって、「在日」でない他の相手との関係ではどうしても「並んで座る」ことはできず、「向き合う」関係の中からしか始まらない葛藤が浮き彫りにされるのである。

「在日」の杉原が、「僕の身体が緑色だったらいいのに」と叫ぶシーンは、見た目はわからないから誰もが「並んで座る」ことのできる関係と思って近づき、「在日」とわかった途端、皆離れていく酷薄さを鋭く突いていたのである。彼からすれば「在日」であろうとなんでであろうと、俺は俺なんだよということであった。日本の社会で「並んで座る」ことができるのは、まず同じ日本人同士であった。では、日本人以外では「並んで座る」ことはできないのか。できないのである。少なくとも葛藤を乗り越えなくてはならない。「並んで座る」関係を描き始めた日本文学は、その関係自体も自然を装いながら「支配と被支配の葛藤」の果てに生みだされた、「支配と被支配」を刻印された関係であることに目をつぶって、「並んで座る」関係がけっして日本の社会では自然に訪れてこない関係であることを除外していたのである。

映画『GO』は、「在日」の少年が日本人の少女と「並んで座る」関係を持つためにも、向き合わざるをえなくなることを描いてみせたのだ。日本文学が描いてこなかった「並んで座る」関係の欠落部分を、真正面から提出したのである。` なんなんだよ一、これは`と繰り返す杉原の呟きは、日本人同士が自然にそうしているようにみえる「並んで座る」関係の中にあえて入っていかない途を選択しようとする意志のあらわれにほかなかった。日本人同士の「並んで座る」関係が虚構であり、よく見つめると、日本人同士の中でも「並んで座る」関係の中に無数の亀裂が走っていることを浮かび上がらせていたのだ。「向き合う」関係がこんなにも不穏な空気を漂わせなくてはならない時代に踏み入っているのかと思わず感じ入ってしまうほど、小気味いい青春映画であった。行定勲監督が、続けて観た『リリイ・シュシュのすべて』の岩井俊二監督の下で助監督を務めていたことを知って、合点が行くと同時に、その奇遇にも少し驚いている。

2001年11月18日記